

令和2年度

滋賀県発達障害者
自立生活移行支援事業報告書

社会福祉法人 グロー
びわ湖ワークス・ジョブカレ

目次

第Ⅰ章 事業実施の背景と目的

- 1. 現状と課題……………1
- 2. これまでの事業の経過……………3
- 3. 事業の目的……………4

第Ⅱ章 事業実施報告

- 1. 地域生活へのスムーズな移行のために必要な支援について
 - (1)事業の内容……………5
 - (2)利用終了者の状況……………5
 - (3)実績……………6
 - (4)効果……………7
 - (5)まとめ……………8
 - (6)考察……………8
- 2. 自己理解について
 - (1)事業の内容……………10
 - (2)研究会について……………10
 - (3)検討事例……………10
 - (4)自己理解に関するジョブカレでの取り組み(プログラムの効果について)……………14

(5)考察	15
-------	----

「自己理解を促す支援からの気づき」

福井県立大学看護福祉学部 相馬大祐氏	17
--------------------	----

3. 発達障害者の居場所づくり(ゆるカレ)

(1)事業の内容	19
(2)立ち上げ準備	19
(3)ジョブカレとゆるカレの差別化について	31
(4)ジョブカレ利用者からのゆるカレに対する意見	32
(5)活動実績	33
(6)今後の課題と見通し	34
(7)考察	34

I 事業実施の背景と目的

1. 現状と課題

社会福祉法人グローでは、滋賀県の委託を受けて、平成17年度から知的に遅れない発達障害者を対象として、グループホームのフレームを使った高機能自閉症地域生活ステップアップ事業を実施してきた。グループホームでは、障害特性にあわせた生活支援を行っていたが、その際、日中活動との連携が難しく、支援の整合性が課題となっていた。その実践から、発達障害者支援に特化した日中活動の場の確保の必要性や、日中の場と生活の場での統一した対応による支援の必要性等の課題が見えてきた。そこで、平成24年度にジョブカレを立ち上げ、高機能自閉症スペクトラム等の発達障害のある人に対し、生活と日中の場で一体的な支援を提供し、本人の自己理解を進める支援、就労準備のための支援、生活スキルを向上させるための支援等を行っている。

ジョブカレの事業が始まって8年が経過し、35人が利用を終了した。ジョブカレを利用する人の多くが、利用目的を「就職」と「一人暮らし」と挙げるが、利用終了後の進路としては、利用終了者の内「就職」が23%、「一人暮らし」が40%となっている。

すべての人がスムーズに地域移行できたわけではなく、日中活動の場が決まらず自宅に戻った人は全体の40%いる。この40%の人たちは、ジョブカレ利用中も通所が困難であり、その先の方向感も定まらなかったため、すぐに次の活動の場を見つけることが難しかった。通所が困難であった理由としては、二次障害が重く不調が続いていた、利用当初から本人の目的意識が希薄で通所することに意義を見いだせなかった、そもそも「障害」に抵抗感があり他利用者や自分の障害を受け入れられなかった等が挙げられる。自宅に戻ったケースは、その後家族だけで対応していることが多く、家族の負担も問題となっている。

一方で、就職が決まって退所した人たちも、その約半数が、人間関係(上司、同僚とのトラブル等)を理由に転職をしている。福祉的就労に移行した人たちも、慣れるまでに時間がかかることや、他利用者等との関係で悩みを抱えている人が多く、利用終了後も、ジョブカレが何らかの支援(時には手厚い支援)を継続して行う必要があるケースが多い。

このようなことから、高機能発達障害者の地域へのスムーズな移行とその後の安定した生活が課題としてあがってきた。地域で暮らしていくためには、本人にあった日中活動の場の確保や、気軽に相談できる場、生活の安定が重要なこととなる。地域で安心安全に暮らせることで、本人のQOLが向上し、自分らしい生活の形

を見つけていくことが可能となる。結果家族の心理的、経済的負担の軽減も図られる。そして、ひいては、引きこもり等を防ぐことにも繋がるのではないだろうか。

ジョブカレでは、退所後も、本人からの希望があれば、フォローアップを行っているが、支援者から見て継続した支援が必要だと考えるケースでも、本人にその認識がなく、支援が途切れてしまうことがあった。ジョブカレ利用終了者の中には、福祉との関係を切ってしまう人もおり、生活がうまくいかなくなった例もある。安定した生活を送るために、本人が自分自身を理解し、支援の必要性や自分に必要な支援を理解することは、地域での安定した生活に必要不可欠ではないだろうか。以上のことから自己理解支援を合わせて行うことで、地域移行をより効果的に目指すことができると考える。

先にもひきこもりについて触れたが、近年、ひきこもりが社会的に大きな問題となっている。その中の何割かは、発達障害が理由の生きづらさからきていると言われている。ジョブカレ利用者は、ひきこもりとまではいかなくとも、利用前はしばらく日中活動をしていなかったという人が大部分を占める。ジョブカレに見学や体験利用に来る人の中にも、在宅期間が長く、一定期間社会との関りをほとんど持たないまま生活していた人がいる。本人と家族が現状を変えるためにジョブカレの利用を検討したが、現在のジョブカレプログラムは「働く」ことに重点をおいているので、ハードルが高く、利用を諦めたケースが複数あった。このような人たちにも、活動の選択肢を広げ、本人のペースに合わせて社会参加の機会を提供することが今後ますます重要になってくると考えられる。

2. これまでの事業の経過

〔発達障害者自立生活支援システム構築事業〕平成24年度～26年度

高機能発達障害者に対して、自立訓練(生活訓練)と宿泊型自立訓練のフレームを使い、就労準備訓練と生活支援を一体的に提供。また、有効なアセスメントや支援プログラム、人材養成モデルの開発等を行う。

〔発達障害者自立生活支援事業〕平成27年度～29年度

障害福祉サービス事業所等へアンケートを配布し、実際に高機能発達障害者がどのくらい福祉サービスを利用しているか、また事業所等が発達障害者の支援においてどのような課題を抱えているか等調査を行い、それを基に事業所等を訪問。意見交換や困難ケースの聞き取りを通して、ジョブカレの支援プログラムやアセスメントツール等の説明や支援方法の提案、助言を行う。3年間で57か所の事業所を訪問したが、利用者本人の課題、支援者の課題を聞き取る中で、高機能発達障害者が、事業所内で困難ケースになっていることが多く、各事業所が苦慮しながら支援にあたっている様子が見えた。そこで、支援者のスキルアップや、事業者間の意見交換を目的に、研修会を開催した。事例検討を通して、アセスメントの取り方や支援のポイント等を学ぶ機会を提供した。

〔発達障害者自立生活移行支援事業〕平成30年度～

ジョブカレの利用を終了した人たちに対して、地域生活へのスムーズな移行のために必要な支援を提供し、フォローアップを通して、地域での生活に必要な支援モデルを作成する。

また、適切な支援が届くよう、本人が自分自身を理解し、支援の必要性や自分に必要な支援を理解することが必要であることから、高機能発達障害者の自己理解に関する研究を事例を通して行い、自己理解を深めるためのアプローチ方法の検討を実施。

支援者のスキルアップを図る研修を実施し、発達障害者に、より専門的な支援を提供できる体制を整えるとともに、受け皿の拡大を目指す。

* 参考:「発達障害者自立生活移行支援事業(ポンチ絵)」(資料1)

3. 事業の目的

一昨年度の事業から引き続き、ジョブカレの利用を終了した人たちに対して、地域生活へのスムーズな移行のために必要な支援を提供し、職場での定着、住み慣れた地域に根差した生活を維持できる形作りを検討する。

さらに、発達障害者が自分の得意不得意を理解し、支援の必要性や必要な支援の種類を自分で選別し、発信する力を身につけられる支援の検討を行い、それを広く利用できるような形にまとめる。

上記を実施することで、身近な地域でより効果的なサービスを継続して受けられる形を検討し、発達障害者が、就労面、生活面で、その人らしい自立した生活を送れるような体制づくりを目指す。

また、在宅期間が長い高機能発達障害者に対して、活動の選択肢を広げて、本人のペースに合わせて活動できる場を提供することで、社会参加を促していく。

Ⅱ 事業実施報告

1. 地域生活へのスムーズな移行のために必要な支援について

(1) 事業の内容

- ・ジョブカレの利用を終了した人に対して、職場訪問や自宅訪問等を行う。
- ・関係機関と情報共有を行い、連携して支援する。
- ・訪問時以外にも、随時電話やメール等で相談を受ける。
- ・本人からの相談だけでなく、職場、家族、移行先からの相談も受ける。

(2) 利用終了者の状況

ジョブカレの延べ利用人数は43名、その内利用を終了した人は、35名である(平成24年7月～令和3年1月)。利用終了後の進路は、下記の表のようになっている。

○ジョブカレ利用終了後の進路（令和3年1月末現在）

《日中活動の場》

進路先	就職	福祉的就労	未定	その他	合計
人数	8	9	14	4	35

《生活の場》

進路先	一人暮らし	グループホーム	自宅	その他	合計
人数	14	4	13	4	35

○フォローしている人の現況(8名)（令和3年1月末現在）

《日中活動の場》

進路先	就職	福祉的就労	未定	合計
人数	6	2	0	8

《生活の場》

進路先	一人暮らし	グループホーム	自宅	合計
人数	6	2	0	8

(3)実績

○内訳

内容	職場訪問	自宅訪問	会議出席	生活支援	関係機関・ 企業連絡	相談	合計
回数 (ケース数)	23 (3)	8 (2)	1 (1)	3 (1)	9 (6)	27 (5)	71

* 相談、連絡等は、電話・メール・来所によるもの。

○内容

〔職場訪問〕

- ・企業担当者から状況の聞き取り等行い、相談があれば話を聞く。
- ・本人の仕事の様子を見て、企業担当者と本人にそれぞれ助言を行う。必要に応じて本人との面談を実施し、企業担当者の意向を伝えたり、相談を受けたりする。
- ・年度変わりに訪問し、新しい上司や担当者に本人の特性等を伝える。

〔自宅訪問〕

- ・自宅での様子を聞き取り、相談を受ける。
- ・保護者からの相談を受ける。
- ・必要がある時は、関係機関へ情報共有し、連携する。

〔会議出席〕

- ・本人の不調が続いた際、今後の対応について助言。
- ・本人の環境が変わる際、本人への対応の仕方を助言。

〔生活支援〕

- ・ジョブカレ卒業直後に、通院、手続き、必要物品購入に同行。

〔関係機関・企業連絡〕

- ・働き暮らし応援センター(障害者就業・生活支援センター)との情報共有
- ・企業との情報共有

〔相談〕

- ・電話やメールで、本人からの相談を受ける。

- ・本人から、現状報告等の連絡を受ける。

(4) 効果

〔職場訪問〕

- ・企業担当者と本人の双方へ、対応の仕方、考え方等を助言し、橋渡しをすることで、誤解が生じることを最小限に抑えられる。
- ・本人の特性を企業側に細かく伝えることで、障害への理解が得られる。
- ・高機能発達障害者特有の言動で、企業担当者が疲弊することがあるが、訪問時や電話にて話を聞くことで、担当者のストレス軽減が図られる。

〔自宅訪問〕

- ・本人がリラックスできる空間で、雑談等を通して、悩み等を聞き取りやすい。
- ・住環境を見ることで、本人の現状をより把握できる。

〔会議出席〕

- ・以前の本人の様子、そこからの見立て等を、今後の支援に生かすことができる。
- ・なじみのある支援者が出席することで、本人が安心する。

〔生活支援〕

- ・環境が変わる際、頼れる家族が不在の場合でも、スムーズに新しい生活に移行できる。
- ・環境が変わっても、本人が、頼れる場があるという安心感が得られる。

〔関係機関・企業等〕

- ・リアルタイムで情報共有することで、緊急時に速やかにサポートに入れる。
- ・関係機関、企業ともに、何かあった時に連携できるという安心感が得られる。

〔相談〕

- ・関係が築けている支援者に相談できる環境があることで、本人が悩みを抱え込まない。
- ・なじみのある支援者との関係が続くことで、本人の気持ちの安定が図れる。
- ・本人に、利用終了後も連絡をしていい場所との認識ができ、一度連絡が途切れてしまっても、再開して、支援が必要な時に関係機関につなぐことができる。

(5)まとめ

<地域移行前に必要な支援>

- ・支援者が、本人の得意・不得意、力が発揮できる環境・苦手な環境、苦手なタイプの人、思考のパターン、自己理解の進行度をアセスメントし把握する。
- ・本人が、正しく自分の特徴を理解できるよう、作業や面談を通して伝えていく。また、本人が自分の特徴を周囲の人に伝えられるよう、ナビゲーションブックの作成等を一緒に行っていく。
- ・地域移行後の日中活動と生活の見通しが持てるように、可能であれば現地の見学、体験等を実施する。
- ・地域移行前から、新しい支援者等との顔合わせを実施し、支援者の役割分担、相談方法等(面談・電話・メール等、相談可能な時間等)も伝えることで、本人が移行後の支援体制に見通しを持てるようにする。
- ・地域移行後のフォローアップの方法や頻度を説明する。
- ・本人の地域移行への不安を共感的態度で聞き取り、不安の軽減を図る。
- ・関係機関への引継ぎを行う。

<地域移行後に必要な支援>

- ・新しい日中活動の場へ同行する。
- ・関係機関と連携してフォローを行う。
- ・新しい支援者や、企業担当者等に本人の特徴や、対応の仕方等をお伝えし、理解(障害理解)を促していく。
- ・新しい生活についての本人の不安を共感的態度で聞き取り、不安の軽減を図る。
- ・今後のフォローアップ体制を伝え、支援体制の見通し(担当者、頻度等)を持てるようにする。

(6)考察

今年度は、新たに就職した人がおり、最初の集中した支援が必要であったことから、企業訪問の回数が増えた。また、新型コロナウイルスの影響で、比較的安定している人の自宅訪問は見合わせるようになった。

高機能発達障害者は、周囲を見てそれに合わせることや、相手の意図を汲んで行動すること、自分の思いを言葉にすること等が得意ではないことが多い。企業では、そういった部分にストレスを感じる人もおり、本人たちが気づかないところで、次第に

職場で孤立してしまうことがある。一般社会では、障害特性の理解がまだまだ進んでおらず、「自分勝手な人」「何を考えているかわからない」等の誤解を生むことも多く、本人たちは自分の言動のどこに原因があるかわからないので、ますます周囲との溝が広がってしまうことが少なくない。

ジョブカレでは、訓練を通して、本人の特性や対応方法、どう伝えたら本人に理解しやすいか、本人がどのように考えているのか等について、ある程度理解できており、本人も「わかってもらっている」という安心感がある。発達障害者は、人と関係を作ることが容易でないこともあり、卒業後もジョブカレがフォローを続けている。

発達障害者を支援し、本人と関係が築けている事業所が、もっと就労定着支援等のサービスを実施できると、サービス終了後も長くその人に関わり続けることができる。環境の変化が苦手な発達障害者について、関係機関へのゆるやかな引継ぎが可能となり、本人たちのより安定した地域生活が実現するのではないだろうか。

2. 自己理解について

(1) 事業の内容

研究会を実施し、ケースを通して、発達障害者に自己理解を促す支援の在り方を検討する。

(2) 研究会について

構成メンバー: 鹿児島大学教育学部障害児教育専修 教授 肥後祥治氏
京都教育大学発達障害学科 教授 佐藤克敏氏
福井県立大学看護福祉学部 准教授 相馬大祐氏
ジョブカレスタッフ

実施日: 第1回 2020年6月19日(金)
第2回 2020年8月27日(木)
第3回 2020年11月30日(月)

(3) 検討事例

◆Aさん

テーマ: 自分の課題に対する自己理解

嫌なこと、不満なことはすべて周りのせいであるという考え方の修正方法

年齢・性別・家族構成	年齢(26)歳 性別(女) 家族構成(母・祖母)
手帳の種類と等級	療育手帳 B2、精神障害者保健福祉手帳 3 級
障害支援区分	なし
生活歴	小学校から勉強に遅れが見られたが、大きな遅れではなく、教師からも障害に関する指摘がなかったため、高校まで通常学級で過ごす。本人は、周りの言っていることが理解できないことがあり、疎外感を感じがちであった。また、友人とのトラブルも多く、学校でも孤立しがちであった。調理関係の専門学校に進学したが、周囲になじめず学校に行かなくなり退学する。その後、販売業や工場のアルバイトを複数行うが、いずれも上司、同僚とのトラブルがあり退職。市の紹介で、ジョブカレの利用を開始。

望んでいる暮らし、訴え、困っていること	ジョブカレ卒業時には、就職をして、一人暮らしをしたいと思っている。
本人や家族の問題	本人が「障害」について理解できず、また、拒否的な反応もある。
本人の能力や環境的問題	体力があり、フルタイム勤務で立ち仕事が可能である。 同じ作業をコツコツと何時間でもやることができる。 遅刻、欠勤をしない。 周りに気を配ることができる。 家族に金銭的余裕があるので、本人の就職が決まるまで援助が可能である。
本人の趣味趣向、楽しみ、長所	DVD やテレビを見るのが好き。 身だしなみがきちんとしている。

○検討会内容

昨年度より検討してきたケースで、検討を重ねる中で結果的に4つの課題に絞って検討と支援を繰り返してきた。一定の成果があったので、今年度でAさんのケース検討は終了とする。

内容の詳細は、時系列にまとめたものを掲載する。(資料2)

(資料2は、個人情報保護のため割愛)

○研究会での総評

- ・職員が本人の変化を感じ取れたことがよかった。
- ・本人が、人に話を聞いてもらうことは自分にとってプラスになることだと学べたことが評価できる。
- ・本人のふるまい等に支援者がひきずられ、客観的な解釈が難しい面もあったが、支援開始から1年半の中で、「支援→自己理解研究会での検討→支援→モニタリング→検討」を繰り返すことで少しずつよい方向に進むことができた。
- ・今後の課題としては、本人の発想の転換方法の習得、アドバイスの伝え方、環境の整え方が挙げられる。

◆Bさん

テーマ： ある程度自己理解が進んでいるが、スムーズに進んで行かない人の支援

年齢・性別・家族構成	年齢(30)歳 性別(男) 家族構成(父・母・兄)
手帳の種類と等級	精神障害者保健福祉手帳 2級
障害支援区分	なし
生活歴	<p>学齢期から、大勢の中にいると疲れる、周りに溶け込めない等の違和感を感じており、学校では孤立気味であった。勉強はそこそこできたので、4年生大学に進学。大学でもほとんど友人ができなかった。就職活動もうまくいかず、就職が決まらないまま卒業。卒業後しばらく自宅にいたが、家族の勧めで県の発達障害者支援センターに相談に行き、その後受診をして広汎性発達障害の診断が出る。</p> <p>コンビニのアルバイトを始めたが、仕事が覚えられない、スピードが遅いと注意を受け、その内欠勤をすることが増え、1カ月で退職。その後、いくつかアルバイトをするが、いずれも1カ月以内に退職となる。その後、数年間は自宅でひきこもり状態となる。</p> <p>30歳が間近にせまってくる中、このままではいけないと一念発起し、自ら発達障害者支援センターへ相談に行き、ジョブカレの体験利用を経て、本利用を開始。</p>
望んでいる暮らし、訴え、困っていること	ジョブカレ卒業時には、就職をして、一人暮らしをしたいと思っている。
本人や家族の問題	本人は、過集中の傾向があり、テレビに熱中しすぎて、十分な睡眠時間が確保できない時がある。
本人の能力や環境的問題	疲れやすいため、作業中もこまめな休憩が必要。
本人の趣味趣向、楽しみ、長所	テレビドラマを見るのが好きで、毎クールお気に入りのドラマを見つけて熱心に見ている。素直で、人からアドバイスを受けたらそれを取り入れようと努力する。

○本人の自己理解状況とアセスメント

	本人の自己理解	支援者の見立てと支援内容
就労	<p>ジョブカレ卒業時には、必ず就職をするという強いモチベーションがあり、ほぼ欠席はなく、朝から通所できている。自分は疲れやすいとわかっているため、就職する際は、初めは短時間から始め、徐々に勤務時間を延ばしていきたいと思っている。ジョブカレ利用前は、できれば一般で働きたいと思っていたが、次第に、自分が働くためには、支援が必要であると感じ、障害者雇用で働くことを希望している。</p>	<p>過集中があり、情報処理にも時間がかかるので、疲れやすい面があり、就労は短時間から開始するのが妥当と思われる。休憩時間や作業スピードの面からも配慮が必要なので、支援者としても障害者雇用が望ましいと考える。できていることを伝えても、「自分はできていないし、ペースが遅いから、こんなことでは就職は無理だと思う」ということが多く、自己評価が低いので、都度、今のペースで大丈夫なこと、作業の基準をクリアしていることを伝えている。</p>
生活	<p>やらなければならないことはわかっているが、時々すべてを投げ出して、終日テレビを見て過ごし、後で自責の念にかられることがある。だらだらと過ごしてしまい、就寝が遅くなってしまうことがあるが、ジョブカレには遅刻せずに行くことができている。就職するという目標があるので、欠席や遅刻はしたくないとのこと。生活リズムが乱れている時は、不調を訴えることが多く、その際は、「原因は寝不足とテレビの見過ぎということはわかっています」と言う。やることの優先順位をつけられないと自覚しているため、どうやって優先順位をつけたらいいか相談があった。</p>	<p>生活の乱れの原因を自覚しているため、本人から生活リズムの乱れの訴えがある時は、テレビを控えめにして早く寝るように声掛けを行うと、立て直すことができる。</p>
コミュニケーション	<p>複数人で話すことが苦手で、疲れてしまうので、昼食時は別室で一人で過ごすことが多い。一方、話の輪の中に入りたいという思いもあり、「人の輪の中に入れなから、就職したら困るのではないかと不安もある。</p>	<p>昼休み等は、必ずしも他の人と話す必要はないことを伝え、実習に行った際、実際に企業の人々の昼休みの過ごし方を見ることができ、一人で過ごすことへの抵抗が和らいだ。</p>

○研究会での意見、助言等

- ・本人は「わかっている」が、「行動できていない」ので、「行動する、しない」にフォーカスをあて、なぜできないかを考える。評価の際は、「やれた、やれなかった」という事実を評価する。
- ・やれた、やれなかったという基準を明確にする。
- ・わかっているからやるだろうと思わず、もう少し踏み込んで、次にどうしたらいいかを職員が提示していった方がよい。やらなければならない行動をリストアップし、まず簡単なことからやっていく(生活パターンの確認、部屋の整理、生活用品の管理方法等)。最低限やらなくてはいけないことも明示した方がよい。
- ・たとえ就職できても、今のような生活状況が続くようなら仕事が続かないと思われるので、仕事が続けられるような支援をしなくてはいけない。コンスタントな行動がどう続けられるか考えなくてはいけない。
- ・利用開始時は順調にしている人ほど、順調にしている時点で支援を手厚くしておいた方がよい。後でくずれてからでは、相当な支援量が必要になる。
- ・本人が言っているほど、細かくはわかっていないことがある。理解して、自己コントロールできるようになって初めて、「自己理解」していると言える。

(4) 自己理解に関するジョブカレでの取り組み(プログラムの効果について)

ジョブカレでは、「就労準備プログラム」「コミュニケーションプログラム」「生活プログラム」の3つの枠で、20程度のプログラムを実施している。自己理解を深めるプログラムとしては、「話そう、聞こう」「自分ってどんな人？」というプログラムを実施している。

「話そう、聞こう」では、自分のことを言語化することで、自分の特徴を意識できるようになること、また、人の話すことを肯定的に聞くことで、自分との違いを発見することを狙いとしている。

「自分ってどんな人？」では、自分の困りごとや他人の困りごとについての解決方法を話し合い、自分にあった解決方法を見つけていくことや、自分の障害特性を振り返り、自分で対応する方法や周囲への配慮の求め方を検討すること、自分に合ったリラックスの仕方を見つけること等を実施している。「自分を見つめなおすこと」と、「他者の意見を参考に新たな気づきを得ること」を目的としている。(＊)

Aさんの場合、うまくいかない要因を他者に転嫁する傾向があったが、自己理解プログラムでAさんが出した課題に対して、参加者から「それは、自分の問題になると

思う」という発言があり、考え込む場面があった。それがきっかけで、考え方が劇的に変わったということはないが、その後、問題に直面すると時々「自分の考え方がおかしいんでしょうか？」と聞いてくることがあり、自分とは違う考え方があるということを知れたということは大きな一歩ではないかと思う。

発達障害者は、般化が難しいという特徴があるので、プログラムを実施しただけですぐに効果が出るとは考えておらず、プログラムを基に面談や日々の活動を通して個々人に落とし込めるようにしているが、支援者側が落とし込める機会を逃したり、本人がその話題を避けたりして、人によってはまったく効果が出なかったということがある。今後は、プログラムの効果をより得られるような日々の支援方法や、プログラムの組み立て方を検討していく必要がある。

* 参考:「ジョブカレ日中プログラム」(資料3)

「プログラム振り返りシート」(資料4)

(5) 考察

自己理解研究会を開始して2年が経過したが、開始当初から検討していたAさんのケースが、一定の成果を得られたので終了となった。一般的なものの考え方と比較すると、本人の考え方や解釈の仕方にはズレがあり、そこに直接アプローチをしていたがなかなかうまくいかず、かえて本人の反発を招いたこともあった。

研究会を通して明らかになったことは、考え方の部分を変えようとしてもうまくいかず、かえて支援者に対して「わかってもらえない」という感情が芽生えてしまうので、認知面はまずは肯定することからスタートするべきだということである。また、本人が感情的になっている際は、受容に徹して話を聞くことが大切であった。

最終的にどうやって本人の考え方が変わってきたのかについては、本人の状態と支援の状態の記録を取ることがポイントになった。具体的には、支援がうまくいった場合とうまくいかなかった場合の記録をつけた。職員からどういったアプローチをして、本人がどう反応したか。本人の言動に対して職員がどう反応し、それが本人にどう影響したか。事実のみを記入し、それを職員間で共有し、見立てを話し合い、次の手立てを考え、実践し、記録するということを繰り返した。そうした中で、次第に以前より本人の攻撃性や不調が減り、本人と職員の関係性も築けていくことができ、うまくいった事例を積み上げていく過程で、少しずつ本人も支援者も自信を持つことができてきたように思う。

成功体験を重ねることで、自己肯定感が生まれ、自分のよいところ、得意な部分
がわかってくると、それに比例して自分の苦手な部分も見えてくるようになる。それを
人に手伝ってもらってうまくいく経験を積むと、苦手なことを発信することへの抵抗感
が薄れ、支援がスムーズになり、本人も生きやすくなるということがこの事例を通し
てわかった。また、自己を理解することが、自然と自分の障害を受け止めることにも
つながっていった。

1. はじめに

発達障害者支援法が施行され 15 年が経過した。この間、早期発見、早期療育の名のもと、乳幼児期から支援が展開されている。一方で、成人期、壮年期となり、発達障害と診断される者も存在する。このように、発達障害と言っても、年代や性別だけでなく、今まで、どのような支援を受けてきたのかという視点も含め、当事者像は多様と言える。この中で、早期療育を受ける機会があった者の中には自身の特性に気づき、自己理解を促進された経験のある者が存在すると想定される。一方で、成人期、壮年期から支援を受けた者は自己理解を促進する機会は少なく、自身の中で何らかの課題を感じていながら、どうしていいかわからない者やそもそも課題意識を持たない者が存在すると考えられる。

このような自己理解を促進する機会が少なかった者を目の前にしたときの支援者の行動は主に2つに分類できると考えられる。1つ目は、自己理解できていないから支援の効果が上がらないと、自己理解できないことを当事者自身の問題であると捉える対応である。この場合、特に当事者自身の自己理解に焦点を当てた支援は行われぬ。2つ目は当事者自身の自己理解ができない要因を探り、自己理解を促す支援方法を探る対応があげられる。一昨年度からジョブカレでは、後者の立場に立ち、肥後祥治先生(鹿児島大学)、佐藤克敏先生(京都教育大学)とジョブカレの職員の方と私が参加する研究会を開催し、事例の検討を行ってきた。この検討会の中でいくつかの気づきについて、本稿では述べたいと思う。

2. アセスメントの視点

自己理解を自身の特性について理解していると捉えたとき、自己理解できているか、できていないかの判断は、どのような情報に基づいて、行われるのであろうか。他者は本人の頭の中を見ることはできない。そのため、本人がどのように理解しているのかを他者である支援者が理解するのは困難と言える。そこで、支援者は多くの場合、本人が適切な行動をとっているかどうかで、自己理解しているかどうかを判断していると考えられる。

しかし、Bさんは生活リズムが乱れていることを、「原因は寝不足とテレビの見過ぎということはわかっています」と発言している。この場合、支援者はどのように判断すべきか迷いが生じる。Bさんは生活リズムの乱れの原因は理解しているが、適切な行動に移せているとは言い難い。この場合、本人は理解しているのだから支援が不要と支援者は考えてしまう可能性もある。しかし、理解していることと、行動できることは異なるという認識が必要になる。すなわち、理解できているから、対処行動ができるわけではないと考え、どうしたらよいか提示していく必要性が研究会で指摘されていた。この点を踏まえると、以下の図のように整理できる。例で示したBさんは、理解

しているが、行動できていない人に位置づく。このほかに自己理解できていないと支援者が判断する人の中には、理解していなくて、行動できない人があげられる。こういった人の場合でも、行動への支援を行っていくことが求められる。

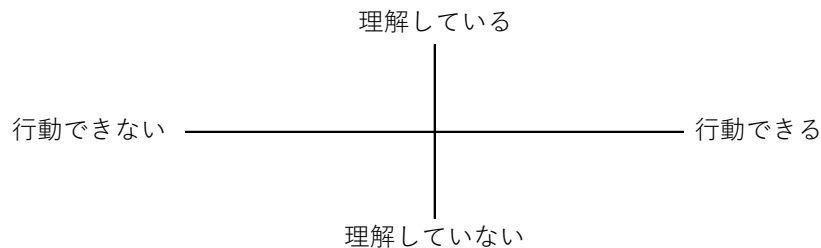


図 自己理解を促す支援のアセスメントの視点

3. 本人の理解を把握する方法

先に他者は本人の頭の中を見ることができないと述べた。そのため、医療や心理といった専門職による情報は重要になる。本人にどのような障害特性があるのか、どのように認識しているのかといった専門的な二次的アセスメントの情報は本人がどのように理解しているのかを支援者が把握するためには重要になると言える。

また医療や心理の専門職ではない支援者ができることもある。例えば、Aさんの場合、イライラをためこみ、それがたまると激しい口調でぶつける様子がみられた。そこで、支援者は支援者による記録と本人による体調、気分の記録を取ることにした。その後、本人による記録はシンプルに、気分を色と表情の絵で表現できるようにするといった工夫が行われている。その結果、支援者が見て機嫌がよさそうな時でも、本人の評価は泣き顔、怒り顔が多い状況が報告されている。この点について、支援者は常に不安、不満を持っていると解釈しているが、一方で支援者と異なる理解を本人はしているという解釈もできる。本人と支援者の記録が相違していることを面談等で話すことにより、支援者側の本人の理解が促進されると考える。このように、本人に自身の理解を促すためには、まず本人がどのように理解しているのかを把握する必要がある。その際に自身の感情を表出しやすい形で表出することや、記録しやすい形で記録することが重要になる。どのような方法なら、本人は自身の感情を表出してくれるのか、支援者の腕の見せ所と言えよう。

4. 集合形式での検討の場の意義

最後に支援者の孤立感をやわらげ、バーンアウトを防止するためにも、複数の支援者や直接、支援に携わっていない者が参加する場は重要である。今回はそれが研究会であったが、報告書に記載があるとおりの、支援⇒検討⇒支援⇒検討といったプロセスにより、支援に対する新たな気づきが得られていると考えられる。このような集合形式での検討の場を設定していくことで、質の高い実践ができると考えられる。

3. 発達障害者の居場所づくり(ゆるカレ)

(1) 事業の内容

ジョブカレの見学や体験利用に来る人の中に、在宅や入院期間が長く、一定期間社会との関りを持っていないという人が複数いた。このような人たちは、ジョブカレの活動内容や開所時間等に難しさを感じ、利用に結びつかないことが多かった。また、利用を開始したが、朝起きられない、活動についていけない等の理由で通所することが困難なケースもあり、十分なサービスを提供できないまま退所することもあった。

ジョブカレの提供しているサービスと合わなかったのでやむを得ない反面、自立訓練を通して社会参加への一歩を踏み出そうとした人たちが安心して活動できる場を作り、社会とのつながりの足掛かりにできないかということ課題として感じていた。

そこで、今年度よりゆるカレを立ち上げ、活動場所がなくひきこもりがちな発達障害者に対して、居場所(個別活動の場)を提供する事業を開始した。

(2) 立ち上げ準備

今年度は、新型コロナウイルスの関係で、他事業所の見学時期が遅れ、周知活動が郵送のみの実施となる。

◆開設までの経過

4月 滋賀県発達障害者支援センターに、ゆるカレ開設検討委員会への参加を依頼

5月 ゆるカレツイッター開設

6月 第1回ゆるカレ開設検討委員会開催
物件探し(ゆるカレの活動場所として一軒家やアパートを探す)
ジョブカレパンフレット改定、ゆるカレリーフレット作成

7月 第2回ゆるカレ開設検討委員会開催
物件探し(ゆるカレの活動場所として一軒家やアパートを探す)

8月 第3回ゆるカレ開設検討委員会開催
他事業所見学

9月 第4回ゆるカレ開設検討委員会開催
他事業所見学
パンフレット・リーフレット郵送(周知活動)

11月 第5回ゆるカレ開設検討委員会開催
ゆるカレ開設場所決定(法人所有のグループホームの空きスペースを利用)
法人職員に寄付物品募集をかける
開設場所整備

12月 活動開始

◆ゆるカレ開設検討委員会

<第1回>

日時:2020年6月16日(火)10:30~

場所:滋賀県発達障害者支援センター(北部センター)

参加者:ジョブカレスタッフ

滋賀県発達障害者支援センター相談員

【検討議題】

○ゆるカレ開設までの経緯説明

○開設までのスケジュール共有

○新しいパンフレットについて情報共有

○物件(開設場所)探しの経過報告

・一軒家(駅から徒歩10分 修繕必要箇所多数あり)

○今後の検討内容

・利用対象者像の具体化

ジョブカレとゆるカレの利用者の分け目のラインは?

サロン形式は、ニーズにマッチしているのか?

・ニーズ調査

・プログラム内容

・他施設見学

・周知方法

【今後の課題・予定】

- ・見学先を検討
- ・ゆるカレ単独のチラシ作成
- ・物件探し

<第2回>

日 時:2020年7月10日(金)13:30～

場 所:ジョブカレ

参加者:ジョブカレスタッフ

滋賀県発達障害者支援センター相談員

【検討議題】

○1回目の検討会について

会議録を発達障害者支援センター内で共有。

→当事者のニーズが明確でない。分かりにくいのでは？と意見があった。

→ジョブカレの卒業生で通所が難しかった人から、どんな形の活動があったら通所できたかのニーズを聞けるか？

→他施設の見学に行く。

○物件探しの経過報告

・アパート(2DK)

・長屋(4DK)

→部屋はたくさんあった方が、一人一部屋で活動できて良いのでは？

アパートはたくさん人が住んでいるところなので、他の人の目が気になり、気楽に出入りにくいのではないか。

○活動の詳細について

・開所時間

→働いている人が、仕事終わりに集まれる場所がほしいというニーズは高いが、ゆるカレの趣旨とはズレるかもしれない。

最初は午後のみでスタート。ニーズによって要検討。

週3回の開所からスタートする。(開所以外に電話やメールの支援も必要。)

・活動内容

→週1回ミーティングを行ってはどうか。

(何しても良いという時間がしんどい人もいる。)

実際のニーズ例(発達障害者支援センターより)
図鑑と一緒に見る。漢字ドリル等をする。
通信制の高校に行くための勉強(学習支援)。

・必要備品

TV、wi-fi、ベッド、任天堂スイッチ、携帯 等

・その他

見学、体験はできるようにする。

送迎は、アパートから1日何便か出す必要がありそう。

○周知方法

・パンフレットに添えるチラシ

→Q&Aを入れる。

例)家から通える？

ゆるカレのみの利用は可能か？

1日を通して活動しなくてはいけないのか？

お昼ご飯はどうする？

1日のスケジュールは？

・発達障害者支援センターの公開講座(9/30)でゆるカレのチラシを配布

【今後の課題・予定】

・パンフレットに添えるチラシの作成

・他事業所への見学

・ニーズ調査

<第3回>

日時:2020年8月7日(金)15:00～

場所:能登川コミュニティーセンター

参加者:ジョブカレスタッフ

滋賀県発達障害者支援センター相談員

【検討議題】

○物件

一軒家……メリット:家賃が安い。

デメリット:建物が古くて汚いので、若者に受け入れられるだろうか。

アパート……メリット:駅から近い。きれい。

デメリット:家賃が高い。

コミュニティーセンター……メリット:家賃がない。インターネット環境がある。

開催場所の融通が利きやすい。

デメリット: 予約が必要。週に何度も借りられない。

準備物を毎回運ぶ必要がある。

→ひとまずコミセンで始めてはどうか？

ずっとコミセンを利用し続けるのは難しいので、部屋探しは継続して行う。

○見学・体験の方法

- ・職員が活動例を示してはどうか？

例) 写真を撮ったものを展示しておく。

プラモデルを作ってみる。 →実物を示せるように。

人生ゲームを置いておく、やっているところを見てもらう 等

→活動している様子をツイッターにアップする等。

- ・見学の申し込みの時に好きな活動を聞いておく。

→見学に来られた時に準備しておく。

- ・見学は見学会と個別の見学の2パターンを導入してはどうか？

例) 見学会(支援者向け)

個別見学(利用者向け)

オンライン説明会の導入を検討しては？

○チラシ

見学の日時を入れておいては？

→見学の情報はツイッターでアップする。

チラシに「見学等の情報はツイッターでアップさせていただきます」の文言を入れる。

○ツイッター

紹介動画を作っては？

活動例として、職員で活動を行い、内容や写真をアップする。

開所式をやってみる等、様子をアップして雰囲気が伝わるようにする。

【今後の課題・予定】

- ・チラシの配布
- ・事業所見学
- ・設備検討
- ・ツイッター更新(活動内容、紹介等)

<第4回>

日時:2020年9月14日(金)10:30~

場所:ジョブカレ

参加者:ジョブカレスタッフ

滋賀県発達障害者支援センター相談員

【検討議題】

○周知

- ・利用者をどう集めていくのか？
ジョブカレに見学に来た人の中から？周知先に紹介してもらう？

○ツイッター

- ・活動に使用する物品のみをアップし、人物は写らない方がよい。
ツイッターに上がっている活動は、できると思って来るので、実際に使用できる物品のみをアップする方がよい。
- ・紹介文等はなるべく具体的に記入する。
- ・ゆるカレとは？の説明文を入れる。
- ・パンフレット、チラシはリンクに貼りつけておく。

○物品(活動に使用するもの)

- ・活動場の棚に使用できる物品を並べて置き、そこから選んでもらう。
各物品には手順、マニュアルをつけておく。
- ・法人内の各施設職員に物品の寄付を募る。
- ・欲しい物品のリストを作成する。
(例)楽器、漫画、スポーツ用品、ボードゲーム、トランプ等

○活動

- ・今いる利用者に、どんな活動があれば来たいと思うかを聞き取る。
- ・ボランティアの人に来てもらう。外部の人員を取り入れる。
- ・アルバイトとして当事者の人に来てもらう。
(役に立っている、お金がもらえることを実感してもらえる)
- ・単発のイベント型のゆるカレをしても良いかも。
インスタやzoomでの配信も行う。
- ・オンラインでの参加は実際には外出していないが、ゆるカレに来られるためのステップになるのでは？
→誰かと何かをするための、つなぎとしてはあり。
- ・ジョブカレの活動と重なる部分はゆるカレの活動としても取り入れては？

- ・「発達障害について語ろう」というイベントをしては？
- ・活動に使う物品は、ある程度はゆるカレで揃えておいて、それ以外は好きな活動をするために、自分が持っている物をもってきて活動をしてもらうことを当初想定していた。
- 持ち出してまで外でやろうという人は少ないのでは。
- ゆるカレに行けば物があって、活動できるなら行ってみようかと思う。

【今後の課題・予定】

- ・活動に使う物品等を集める(いらなくなったものの寄付を各施設に募る)
- ・設備検討
- ・ツイッター更新(活動内容、紹介等)

<第5回>

日時:2020年11月6日(金)10:30～

場所:グループホーム(ゆるカレ活動場所)

参加者:ジョブカレスタッフ

滋賀県発達障害者支援センター相談員

【進捗状況報告】

○活動場所

- ・法人所有のグループホームの空きスペースに決定した

○周知

- ・ジョブカレパンフレット、ゆるカレチラシを関係機関に郵送済

○ツイッター

- ・事業紹介 投稿済
- ・活動例「職員がやりたいこと」投稿済

○活動内容について

- ・ジョブカレ利用者への聞き取りのため、グループワークを実施
 テーマ:「どんな活動があれば部屋から出てこられるか」
 「ジョブカレを利用したきっかけ」

【検討議題】

○活動スペース

- ・勉強ができるように、壁向きのデスクを設置
- ・休憩室は、奥の部屋を片付ける。ベッド設置

○活動

- ・最初は、活動日(火・水・金)の内1~2日から始める
- ・送迎は、対象の利用者が来た時点で検討。
- ・見学の時点で、できるだけアセスメントを取っておく。
どのくらい利用したいかの聞き取りもしておく。

◆事業周知

- ・ツイッター開設

- ・パンフレット、チラシ郵送(237カ所) (*)

内訳	就労継続A型事業所	18カ所
	就労継続B型事業所	130カ所
	就労移行支援事業所	11カ所
	自立訓練事業所	12カ所
	働き暮らし応援センター	7カ所
	(障害者就業・生活支援センター)	
	特別支援学校	14カ所
	医療機関(精神科・心療内科)	43カ所
	県外発達障害者支援センター	2カ所

* 参考:「ゆるカレ利用者募集チラシ」(資料5)

◆活動場所について

活動場所は、当初よりジョブカレとは別の場所を想定していた。静かな落ち着いた場所でゆったり活動を行いたいということと、中には、ジョブカレ利用者と自分を比べる人もいるかもしれないという理由からである。

物件の条件としては、通所だけの利用も可能なように駅から歩ける範囲であること、静養等もできるように部屋が複数個あること、貸主が、福祉サービスのために利用することに理解があることであった。始めはアパートを想定していたが、アパートは居住用に使わない場合は利用を断られることが多く、また利用者が近隣の目を気にするのではないかとの意見があり、一軒家にシフトした。しかし、一軒家は、駅から遠い物件が多く、家賃を抑えようと思うと築年数がかなりいっており、その古さ、汚さ

が利用者に受け入れられるかの懸念があった。どの程度の利用が見込めるか見通しの立たないまま物件を探していたが、家賃との兼ね合いが難しいこともあり、一時中断。その後、ジョブカレ利用者が住む宿泊型自立訓練用のアパートの近くの、当法人のグループホームの空スペースを利用できることになり、そこを清掃、整備して活動を開始した。

◆必要物品

備品	
パソコン	かけ時計、置き時計
テレビ	パーテーション
通信機器(スマートフォン)	スタンドライト
Wi-fi	電子レンジ
電気ケトル	お皿
ベッド	コップ
座布団	

活動物品	
ボードゲーム (人生ゲーム、モノポリ等)	キーボード
	ボール
テレビゲーム (マリオカート、ぷよぷよ、桃鉄等)	ドンジャラ
	カロム
かるた	プラレール
ジグソーパズル	レゴ

◆他事業所見学

<p>日時:2020年8月18日 10:00～</p> <p>訪問先:滋賀県地域若者サポートステーション</p> <p>1. 実施事業内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ・相談者に対しての就職に向けたカウンセリング ・職場体験の提供→ほとんどの人が一般で就職していく ・すぐに就職が難しい人は、関係機関へつなぐ ・概ね半年で相談終了
--

2. 利用者の傾向

- ・就職を目指して相談に来るが、生活リズムが乱れている等そもそも就職に向けての準備が整っていない人も多数いる。
- ・相談員から見ると、障害があるように感じられるが、障害に気づいていない、または受容できていない人も多くいる。
- ・社会、人と接してきていない人が多い。
- ・本人、家族ともに「就職」と言うことに目が向いてしまい、働くための社会性や生活力にまで思いが至らないこともある。
- ・相談員から見て就職が難しいと感じても、本人がそれを受け入れられない場合は、一度就職して難しい点を経験してもらうこともある。ただ、失敗経験のダメージが大きすぎる人もいるので、対応は個別に慎重に行う。

3. ゆるカレについての意見

- ・相談者の中には、就職したいがどこかに毎日通って訓練するのは難しいという人もいるので、毎日通わなくていい場があるとありがたい。
- ・就職につながるようなイメージも持てると、就職を目指したいという人にはいいのではないか。
- ・工賃が発生することに惹かれる人もいる。

日時:2020年8月25日 13:30～

訪問先:NPO法人芹川の河童 通信サロン「誰にも会いたくないカフェ」

1. 実施事業内容

- ・ひきこもり、不登校の若者のためのサロン運営。(市事業)
- ・ひきこもりの相談が多く、ひきこもりの若者に学童で働いてもらったらマッチすることが多かった。その経験から事業を始め、当初は滋賀県立大学教授との共同研究の形で開始した。
- ・現在定期的に利用しているのは11人。

2. 取り組み、利用者の傾向

- ・商店街の中(町の駅)にサロンを作り、地域の人にも立ち寄れるようにしている。
- ・自分の好きなことができる場を提供しており、支援者は過度に関わらないようにしている。
- ・初めは利用者の集め方がわからず、学童で働いている若者(ひきこもり経験あり)に来てもらって開催していた。
- ・若者が惹かれること:「おしゃれ」「TRPG」

・ほとんどの人が支援はされたくないと思っている。むしろ人の役に立ちたいと思っている。

・「働かなくてはいけない」と伝えるよりも、「どうやったら生活できる？」という風に考えてもらった方が入りやすい。

・サロンに来て仲間と過ごせるようになった後の進路を考えることが今後の課題。

3. ゆるカレについての意見

・現在サロンに来ている人たちでシェアハウスに住みたいという要望がある。ゆるカレは宿泊型があるので、一人暮らしが経験できるのは大変貴重なことだと思う。

・実施場所があまり古いと若者は集まらないと思う。

・「相談」「支援」を掲げると、利用に抵抗が生まれるかもしれない。

日時:2020年9月1日 11:00～

訪問先:滋賀県ひきこもり支援センター

1. 実施事業内容

・本人・家族等からの相談を受けている。(電話や面談等)

・グループ活動の実施(居場所づくり、作業等)

・家族交流会の実施

2. 利用者の傾向

・家族からの相談でつながるケースが8割。

・相談に来ている人は、いきなり就職することは難しい人が多い。

就労支援ではなく、居場所のニーズは高い。

就労と自宅との中間の居場所があると良い。

・興味の幅が狭い人が多い。

・サロンに行くことが出来ない人がいる。

理由としては、目的が不明や曖昧であること、自由に過ごすことが苦手なこと等

・面談では、興味の話から少しずつ会話の幅を広げていっている。

・「働きたい」と言われるが、主体的に言っているのではなく、周りの人の意図を組んで言っていることが多い。

・居場所のような場所がないので、ゲーム会などの情報を見つけて繋げて、外に出るきっかけにしている。

3. ゆるカレについての意見

・ジョブカレのプログラムに乗れる人はどこのプログラムにも乗れることが多いので、ゆるカレのように自分のペースで参加できるプログラムへのニーズは高い。

- ・パンフレットに、就職を目指すジョブカレの内容もセットで含まれているので、まずはゆるカレからスタートしてステップを踏んでいくというような目的を対象者に分かりやすく説明出来る。
- ・利用前から、何を目標にするかは明確にしていく必要がある。何をして過ごしたいかの目的を一緒に作ると良い。
 - 目標を立てておくことがプレッシャーにならないか？
 - 程度は個々に異なるが、目標は必要。プレッシャーでしんどくなってしまう方はそもそもひきこもりセンターに繋がっていない。
- ・好きなことから取り組んでいけるのは、入りやすそう。
 - 興味関心が狭い人が多いので、本人のニーズに合わせる事が大切。
- ・見学の形としては、説明会ではなく個別の見学やツイッター等での紹介の方が良いと思う。
- ・宿泊型自立訓練を利用したときに、ゆるカレに週3日通ったとして残りの日はどのように過ごすのか？自分で過ごし方を作ることが苦手で出来ない人もいるので、余暇の過ごし方の検討が必要。
- ・ひきこもりの人が自分で暮らしていくための練習の場がほとんどないので、宿泊型自立訓練のニーズは高い。

日時:2020年9月9日 10:00～

訪問先:社会福祉法人さわらび福祉会 甲賀・湖南ひきこもり支援「奏-かなで-」

1. 実施事業

- ・ひきこもり状態の人へのアウトリーチ(甲賀・湖南)
- ・ひきこもりの家族支援
- ・事業開始5年。本人支援は約30人(発達障害診断有は内10人。発達障害傾向有は多数)。家族支援は19組(保健所での家族からの聞き取りだけでも、本人に発達障害傾向が見られるケースが多い)。

2. 取り組み、利用者の傾向

- ・本人に会えるまで数カ月、一緒に活動ができるまで数年かかる人もいる。
 - ・本人との接触のきっかけは、本人の好きなことを一緒にやることから。
 - ・本人の好きなことが、支援者の興味のないことでも、できるだけ興味を持って付き合うようにしている。支援者以外の人とも接触が可能な人は、好きなことが共通する人につないで、他の人とも関わられるようにしている。しかし、中には、好きなことが同じ人とも接触が難しい人もおり、支援者としか関われない人もいる。
- 例)ポケモンカードゲーム(本人ルールに従って)、映画鑑賞、萌アニメDVD鑑賞、野球観戦

- ・本人たちは傷つき体験があり、自分に自信が持てない。
- ・本人は、家族から期待されているので、「就労を目指したい」と発言するが、よく話を聞いていくと「本当は誰かと一緒にゲームをしたかった。でも仕事もしていない自分がそんなことを言えないと思っていた」というケースもあった。
- ・支援者との関係ができてきて、活動が外に向き、作業所に通所できるようになった人もいた反面、少しずつ活動が外に向き始めたと思った矢先に頑張りすぎていた反動で、強力なひきこもり状態に戻った人もいる。
- ・奏の関り(内職を自宅以外の場所で行うことができるようになっていた)を負担に思っていた人がいて、関係性を切ってきたが、その後自分でアルバイトを探し、今は週2日、半日働いている。奏の関りに耐えられたんだから、外で働けると自分で思えたそう。
- ・一般的に社会で経験してくること(対人面や仕事でのトラブル等)を経験していないので、外部からのささやかな刺激でも耐えられないことがある。
- ・本人の得意なことを使って地域とつなげていくことを目指している。
- ・支援者と関わりを持てた後の展開を考えていくことが今後の課題。
- ・関係機関との連携が必要不可欠。

3. ゆるカレについて

- ・奏とゆるカレは、業態は違っても、今までの事業の運営の中から必要性を感じて始めた事業ということが、共通すると思う。今後も情報交換の場等持てたらいい。

(3) ジョブカレとゆるカレの差別化について

ゆるカレ開設にあたり、日中活動としてのジョブカレとゆるカレそれぞれの実施内容、対象者等を明確にしておく。生活(宿泊型自立訓練)については、共通とする。

<日中>

【ジョブカレ】

キーワード:「働く」

対象者:1日(初めは短時間でもゆくゆくは1日)を通して活動に参加でき、何らかの形で「働く」ことに目標をおいている人。

実施内容:就労(一般、障害者雇用)、福祉的就労を問わず、「働く」意欲を高め、さまざまな訓練を通して「働く力」を養う。

【ゆるカレ】

キーワード:「見つける」

対象者: 集団活動が苦手、朝起きられない、引きこもりがち等の課題があるが、何か活動を始めたい、誰かと関わる時間を持ちたいという意欲が芽生えてきた人。

実施内容: 個別活動、本人が参加しやすい活動を通して、家族以外の人と関わる時間を持てるようにする。本人のペースに合わせて活動し、少しずつ社会参加を促していく。自分のやりたいこと、望む生活等を活動を通して見つけていく。

<生活>

キーワード:「暮らす」

対象者: 身の回りのことが自分でできるようになり、生活を整えたい人。

実施内容: 家事、金銭管理、所持品整理等についての支援を行い、生活スキルの向上を目指す。

(4) ジョブカレ利用者からのゆるカレに対する意見

現在ジョブカレを利用している人も、ジョブカレ利用前は、離職や作業所を退所してしばらくは日中活動をしていなかった人がほとんどである。そこで、ジョブカレ利用者に、ゆるカレを開設する目的等を説明し、ジョブカレを利用するきっかけや、どのような活動があれば参加しやすいか等の聞き取りを行った。

【ジョブカレを利用しようと思ったきっかけ】

- ・一般で働いてきたが、うまくいかず仕事が続かないので、訓練を受けてみようと思った。
- ・ジョブカレに来たら、今までうまくいかなかった理由が分かるかもしれない、何か変わるきっかけになるかもしれないと思った。
- ・家族との折り合いが悪く、一人暮らしを希望しているので、その練習のため。
- ・以前は働ける状態ではなかったが、少し状態がよくなってきたので、就職をするための訓練を受けたいと思った。
- ・自分のことや発達障害のことがたくさん知れるかもしれないと思った。
- ・今までのトラブルの経験から、しゃべるのが怖いという気持ちがあったが、自分で

変わらないといけないと思って利用した。

・社会のことをもっと知らないといけないと思ったので、誰かに教えてもらいたいと思った。

【どんな活動、場等があったら参加しやすいか】

- ・相手と話さなくてもできるゲーム(オセロ等)。
- ・パズル、読書、計算プリント等一人でできること。
- ・一人で黙々とやれる作業。
- ・みんなと一緒には無理でも、いつまでも一人でいたいわけではないので、一人で過ごせる空間を用意しておいて、徐々にみんなと一緒に行動できるようになればいい。
- ・イベントがあると参加しやすい。
- ・送迎があると部屋を出やすい。
- ・お茶会は、何か話さないといけないと思うとしんどい。
- ・支援者の方から活動の提案があると乗っていきやすい。
- ・初めの内は担当者を固定しておくと話がしやすく、慣れてきてから、徐々に関わる人を増やしていく。
- ・支援者がどんな人かわかると少し安心できるので、支援者のプロフィール表があるといい。

(5)活動実績

○活動内容

開催日:毎週火・木曜日

時間:13時~14時

場所:グループホーム別館(宿泊型自立訓練施設より徒歩3分)

送迎:なし

内容:トランプ、オセロ、ボードゲーム、雑談、内職、パソコン練習等

○参加人数、活動日数

利用者数:2名

体験利用者:1名

見学:2名

	活動日数	参加延人数
12月	8日	10人
1月	8日	12人

(体験利用者含む)

(6) 今後の課題と見通し

今後は、活動内容の充実や、利用者それぞれの目標設定の仕方、開所日・開所時間の拡大、地域資源(人・場・物等)の活用等が課題として挙げられる。(＊)

そして、対人恐怖等のある人の参加も想定されるため、対応する職員のスキルアップも必要となる。

また、ジョブカレとゆるカレの併用があった場合は、本人、家族の希望と、支援者の見立て、関係機関の意見等をトータルで考えて、その人にあった活動の検討が必要である。

*参考:「かかげてみよう! 未来予想図」(資料6)

「ゆるカレ振り返りシート」(資料7)

(7) 考察

ゆるカレの周知をしてから、ジョブカレの利用相談が、昨年同時期(10月～翌1月の4カ月間)は3件であったのに対して、今年度は12件に増えており、実に4倍の数となった。見学者から「初めはジョブカレを使いたいが、途中でしんどくなった時はゆるカレに移ることはできるか」「ゆるカレとジョブカレを並行して利用することは可能か」との問い合わせが多い。このことから、ゆるカレがあることによって、ジョブカレ利用へのハードルが下がり、利用を開始しやすくなっていることがわかる。それは、社会参加への一歩を踏み出しやすくなっているのではないだろうか。

現在のゆるカレ利用者についても、ゆるカレの場がなければ、利用継続や受け止めが難しかったので、我々職員としても、ゆるカレを開設してよかったと実感している。

ゆるカレは、ニーズから生まれた事業であることから、活動を通して今後さらに的確にニーズをキャッチし、柔軟に対応しながら少しずつ規模を広げていき、発達障害者の社会参加へつなげていきたい。